

第二目 大正七、八年以降時代(八年式魚雷出生以降時代)
曩ニ歐洲大戰ノ突發以來參戰諸國艦艇ノ魚雷ニ依ル被害狀況竝ニ艦艇水中防禦ノ増進ニ鑑ミ裝藥量増

加ノ欲求ノ切ナルモノアリシハ既述ノ如クニシテ差當リ應急策ヲ講ズルト共ニ他方之ガ根本的解決策ヲ樹立スルノ急ヲ認メシガ尙同時ニ輒近急激ニ増大セル戰鬪距離ノ變遷ニ順應セシムルノ必要上當局ニ於テハ廣ク各部ノ意見ヲ徵シ極秘裡ニ跳躍の大徑魚雷ノ設計ヲ建テ着々之ガ實現ニ努力スル所アリ前項六年式魚雷ノ實驗發射ニ先チ大正六年一月決裁ヲ經テ之ガ試製ニ着手セリ而シテ後日ノ所謂八年式一號ト稱セラレシモノハ主トシテ海軍中佐丹野武雄同二號ト稱セラルルモノハ主トシテ前記六年式製作者ト稱スベキ海軍造兵中佐松下正泰ノ各設計ニ係リ前者ハ佐世保工廠ニテ後者ハ横須賀工廠ニテ各二個宛製作スルコトトナレリ而シテ大正八年佐世保工廠試製ノ分即チ八年式一號(四四式系統ノ設計)ハ其ノ試驗發射ヲ行ヘシガ其ノ成績左ノ如シ

二〇〇〇米—二七節

一五〇〇〇米(豫想)—三四、五節

一〇〇〇〇米(豫想)—三九、八五節

六七五〇米—四六、二六節

此ノ間又八年式二號(横須賀造兵部製)モ着々竣工シ試驗發射ヲ行フニ至リ斯クテ大正九年初春兩者ノ比較實驗發射行ハレシ結果大體ニ於テ兩者間一長一短アルヲ認メシモ共ニ概ネ所期ノ能力ヲ顯ハシ在來ノ夫レニ比シ格段ノ優越ヲ示セルヲ以テ九年四月共ニ兵器ニ採用シ各上記ノ名稱ヲ附セラルルニ至レリ而カモ尙完全ヲ期セムガ爲各獨立ニ改造修補セラルル處アリ越ヘテ十一年更ニ軍艦長良ニ於テ實地的比較實驗ヲ行ヘシガ更ニ十二年四月ヨリ驅逐艦浦風ヲシテ本實驗ヲ繼承(長良ハ役務ノ都合ニ依

リ中止ス)セシメタルガ各種發射ニ於ケル綜合成果概ネ左ノ如シ

第一、一號魚雷

(一) 各射程ニ於ケル雷速概ネ平定ニシテ且各魚雷亦略均等ナリ

(二) 長良ニ於ケル實驗發射後材料ノ精選及潤滑ノ方法竝ニ偏心鏢ヲ改造シ高雷速發射ニ堪ヘ得ルニ至リシモ一萬七千米ノ射程ニ對スル雷速ハ長良ニ於ケル實驗發射成績ト幾分ノ差違アルヲ免ガレズト認ム又發射申各部ニ小故障アリ尙研究改良ヲ要ス

(三) 射入状態及駛走状態ハ一般ニ良好ニシテ射入時水面ニ露出セルモノ殆ド無シ

第二、二號魚雷

(一) 機關各部燒損スルコトナク其ノ強度充分ナリト認ム

(二) 實驗ノ初期ニ於テ雷速齊整ナラズ射程ノ終期ニ雷速ノ低下著ルシカリシヲ以テ主調和器ヲ改造シ幾分之ヲ防ギ得タルモ未ダ充分ナラズ且魚雷ニ依リ雷速ノ差違比較的大ナリ研究改良ヲ要スルモノト認ム

(三) 本實驗發射中主調和器ヲ改造セルヲ以テ一萬八千米ノ射程ニ對スル雷速ハ長良ニ於ケル實驗發射成績ト幾分差違アルヲ免ガレズト認ム猶實驗ヲ要ス

(四) 射入状態良好ナラズ射入時水面ニ露出スルモノ多ク且大偏斜不軌運動ヲ爲セルモノアリ研究改良ヲ要スト認ム

之ヲ要スルニ本實驗發射ハ成績概シテ良好ニシテ略研究ノ目的ヲ達シ得タリ而シテ二號魚雷ハ其ノ能力一號魚雷ニ優ルモ尙雷速平定均等ヲ缺キ且射入状態一般ニ良好ナラズ更ニ研究改良ヲ要スト認ム

即チ一般ニ八年式二號ニ於テ優越ヲ示セシヲ以テ爾後八年式一號ハ新製セザルコトニ決セリ斯クテ八年式魚雷ハ兩種ヲ通ジ大正十二年ヨリ艦船ニ供給シ訓練ヲ開始シ翌十三年ニハ第三戰隊ニハ八年

式二號ヲ第五戰隊ニハ同一號ヲ各別個ニ供給シ訓練ノ傍ラ性能上ノ長短ニ就キ攻究スル所アリ八年式二號ニ對シ逐次次ノ如キ改造ヲ加フ(自大正十二年至大正十五年)

(一) 横舵機内徑ノ増大ニ依リ力量ヲ二七%増加ス

(二) 傳働鉗ノ長サヲ延長シ舵角チ一〇%増加ス

(三) 横舵鉗及傳働鉗ノ強度ヲ増加ス

(四) 舵ノ面積ヲ六五%増加ス

(五) 「捻レ」傳働軸ヲ廢シ四四式同様「レバー」裝置ニ依リ操舵鉗ニ連結ス此ノ改造ニヨリ附帶的ニ操舵鉗ヲ眞直ノモノタラシム

(備考) 八年式二號ト同系タル六年式魚雷ニ對シテモ略右ニ準セル改造ヲ行ヘリ

此ノ間六年式及八年式魚雷ハ實施部隊側ニ於テ故障續出シ該兵器ニ對スル信頼度甚ダ薄キノ狀勢ニ在リ六年式魚雷供給ノ第一年タル大正十年第一艦隊司令部ノ意見中左記アリ

當隊ニ供給セラレタル六年式魚雷ハ先ヅ水面航走ヲ爲ス原因ヲ探求シテ之ヲ防止スルニアラザレバ艦隊トシテノ魚雷發射訓練ヲ進捗セシムルコト能ハズ云々

又八年式魚雷供給ノ第一年タル大正十二年教育本部意見中左記アリ

「最近魚雷ハ機構改善シ成績向上セリト雖其ノ精度ハ充分ナラス特ニ左記ニ就テハ改善ノ餘地大ナリ技術當事者ノ研究ヲ望ム

(一) 冷走防止、最近統計ハ發射總數ノ約一七%ニ達シ魚雷不到達ノ最大因ナリ

(二) 大偏斜防止及射入時頭部露出ノ防止

別紙第一及第二ハ魚雷機構性能ノ改善要望ニ關シ實施部隊側ニ於ケル綜合的ニシテ而カモ代表的意見

ナリ蓋シ既記ノ如ク兩種魚雷ノ採用已來當局ニ於テハ實施部隊ニ於ケル成績ニ徴シ自發的ニ或ハ其ノ機構不完全ノ聲ニ刺戟セラレ受働的ニ數次ノ改良ヲ施シタルモ當時ノ情勢ハ概ネ局部的措置ニ止ムルノ外無カリシガ如シ

大正十五年更ニ吳工廠ニ於テ左記改造ヲ施シ實驗スルコトナレリ

- (一) 燃料送法ヲ唧筒式ヲ廢シ空氣壓搾器ニ改ム
- (二) 清水唧筒用輕減弁ヲ油壓式ヲ排シ空氣式ニ改ム
- (三) 右二項ノ主旨ニ基キ必要ト認ムル小改造

乃チ翌昭和二年吳海軍工廠實驗部ニ於テ實驗ノ結果左ノ結論ニ達セリ

- (一) 清水唧筒式輕減弁ノ改造ハ有効ナリ
- (二) 浮揚時浮力ヲ増大ス
- (三) 雷道ノ不定及能力ニ於テハ從來ノモノト大差無シ
- (四) 魚雷機關主要部ニ大損害ヲ惹起スル憂多シ
- (五) 機構複雑ノ程度ハ從來通りナリ若シ安全裝置ヲ新設セバ複雑ノ程度ヲ増加ス
- (六) 冷却防止ニ關シテハ實驗未濟ナリ

即チ本實驗ノ程度ニ於テハ輕減弁ノ作動確實ナルト釣合良好トナリ且浮揚時浮力ノ増大スルトヲ主ナル利點トシ一方魚雷大破損ノ憂多キ缺點ヲ有ス現用魚雷ヲ改造スルモノトセバ輕減弁ノミヲ本案ノ如ク改造シ本案ニヨル燃料空氣壓出法ニハ替意ヲ表スル能ハズトセリ

本實驗ノ成果右ノ如クナルヲ以テ前記(二)ノ改造(清水唧筒用輕減弁ノ改造)ノミハ六年式ハ制式圖ヲ改正シ八年式ニ號ハ制式圖ニ制定スルニ至リシモ其ノ他ノ改造ハ實施ノ見込無キ狀況ニ置カレタリ然ルニ一方橫舵機系統改造ノ成果ハ依然良好ナラズ特ニ昭和二年第五戰隊(八年式ニ號魚雷俱用)ニ於テ然リシヲ以テ同年六月廣島灣ニ於テ古鷹及神通ヲ以テ雷道研究發射ヲ行フニ至リシガ事前ニ於ケル一部ノ改造ト準備ノ周密ニ依リ豫期以上ノ良績(第四編第三章參照)ヲ得タリ而カモ尙爾後各部ニ於ケル成果及希望等ニ關シ更ニ根本的改良ヲ爲スノ要ヲ認メ昭和三年十二月左記方針ニ依リ改造ヲ加フルコトトナレリ

八年式二號魚雷改修方針(摘要)

一、改修要領

改修ニ要スル經費竝ニ工事實施上ノ難易ヲ考慮シ未納庫及納庫魚雷ニ區分シ次ノ如ク改修箇所ヲ定ム

- (一) 現ニ改造中ニ屬スル未納庫魚雷ニ對シ
 - (イ) 火管發火裝置
 - (ロ) 加熱裝置空氣清水及燃料通路
 - (ハ) 氣室溜水排除裝置
 - (ニ) 主調和弁油室戻止弁
- (二) 潤滑油室
- (三) 清水室水溜

(b) 燃料罐送出装入口延長

(c) 清水唧筒唧子衛帶及輕減弁

(d) 深度機浮上角度制限装置

(e) 補助深度装置

(f) 加熱装置通路試験及浮力試験

(g) 改修後ノ領收發射ヲ行フ

(三) 納庫及借用魚雷ニ對シ(略)

二、改修數量及完成期並ニ改修魚雷供給方針

改修セル魚雷ハ昭和五年度聯合艦隊ニ編入ノ第 戰隊及第二水雷戰隊各艦ニ供給スルモノトシ改修魚雷所要數量三一二個ヲ昭和四年十二月ニ完成スルモノトス

斯クテ本魚雷ハ其ノ通有性缺陷タル冷走、射入状態ノ不良、及取扱難澁ニ對スル缺陷ハ現制式ヲ根本的ニ變改セザル程度ニ於テ一段落ヲ告ゲタルヲ以テ本改修魚雷ヲ「改一」ト呼稱シ發射艦速大ナル艦船ヨリ順次配給スル目的ヲ以テ工事ヲ督勵シ漸ク昭和五年度ハ第四戰隊並ニ第二水雷戰隊ニ供給シ得ル運ビトナレリ而シテ改造ノ結果ニヨル成果比較左ノ如シ(發射框發射ヲ示ス)

戰別隊	昭和四年度		昭和五年度	
	要項射程	發射雷數到達率	射程	發射雷數到達率
第四戰隊	/	/	一八、〇〇〇	四八 九七、九

第五戰隊	一五、〇〇〇	五二九〇、〇	一五、〇〇〇	三五	一〇〇、〇
第二水雷戰隊	一〇、〇〇〇	一二八九一、〇	一〇、〇〇〇	二〇六	九一、七

(備考)一、第四戰隊ハ那智級第五戰隊ハ古鷹級第二水雷戰隊ハ昭和四年度ハ白雪級及睦月級、五年度ハ白雪級ノミトス第五戰隊ハ非「改」魚雷トス

二、昭和五年度第四戰隊ノ成績ハ正ニ改造ノ良果ヲ明示スルモノナリ又第二水雷戰隊ニ於テ格段ノ進歩ヲ見ザリシハ補助深度裝置ノ不具合ニヨルモノニシテ之ガ除去改良ニヨリ同年第二次以降ノ發射ニ於テハ優秀ノ成績ヲ示セリ

左記ハ六年式及八年式魚雷供用以後軍艦ニ於ケル標準射程ノ變遷ヲ示スモノニシテ工廠ニ於ケル兵器採用試験發射成績ノ直ニ艦船發射成績ニ適用シ難キ所以竝ニ爾後ニ於ケル兩魚雷改造成果ノ如何ヲ示ス一參考資料ト見ルベシ

魚雷別	年次		大正					昭和				
	九年	十年	十一年	十二年	十三年	十四年	十五年	二年	三年	四年	五年	
六年式	一五、〇〇〇	"	"	一五、〇〇〇 一〇、〇〇〇	一四、〇〇〇 一〇、〇〇〇	"	"	一四、〇〇〇 八、〇〇〇	一三、五〇〇 八、〇〇〇	"	"	
八年式二號	/	/	三〇、〇〇〇	一八、〇〇〇	一八、〇〇〇 三〇、〇〇〇	"	"	一四、〇〇〇 三〇、〇〇〇	一五、〇〇〇 一〇、〇〇〇	"	一八、〇〇〇 一〇、〇〇〇	

亦別紙第三ハ六年式及八年式魚雷ノ普及セラレタル大正十三年以降ニ於ケル魚雷發射數對亡失數ノ概要ヲ示スモノニシテ元ヨリ當時者ノ訓練ノ進展ニ依ルコト論無キモ主トシテ魚雷及關係兵器改善ノ効

果ヲ語ル他ノ參考資料タリ

別紙第一

魚雷公試及命中發射規則改正意見(摘要)

大正十年十月

第一 艦 隊 司 令 部

本年度始メテ長門、扶桑ニ供給セラレタル六年式五十三種魚雷ノ取扱ニ對シテハ當隊ニ於テ關係當事者ヲシテ事前ノ研究ヲ爲サシメ吳工廠及水雷學校ニ於テ取扱法ニ就キ講習セシメ本年三月第一次基本教練ヲ實施シ(中略)第二次基本教練發射ハ第一次ノ成績ニ鑑ミ或ハ最終調整或ハ制止及運動距離ヲ加減スル等専ラ水面航走防止策ヲ研究的ニ歩ヲ進メタルモ第一次ヨリハ一層不良ナリ(中略)如斯狀態ナルヲ以テ當隊ニ供給セラレタル六年式魚雷ハ先ヅ水面航走ヲ爲ス原因ヲ探求シテ之ヲ防止スルニアラザレバ艦隊トシテノ魚雷發射訓練ヲ進捗セシムル能ハズ目下當事者ヲシテ夫々之ガ解決方法ヲ研究セシメツツアリト雖此ノ機會ニ於テ新兵器裝備ニ關シ其ノ性能試験及公試ノ方法ニ就キ關係當局者ニ一考ヲ煩ハサントス

抑モ新兵器ノ新ニ裝備セラルルニ當リ用兵者ガ之ガ活用上先ヅ據ルベキモノハ採用迄ニ施行サレタル實驗及公試ノ成績ニシテ而カモ之レ唯一ノ金科玉條ナリ然ルニ現制魚雷公試ハ單ニ發射機自身ノ公試ニシテ裝備スベキ魚雷ノ機能ト關聯スルコトナク且命中試験モ單ニ水上發射管若クハ發射艇ニ依リ該魚雷ノ性能ヲ豫想セル試験ニ過ギズ從ツテ之等ヨリ得タル諸元ハ艦隊ニ於テ實射ノ場合ニ適用スルニハ單ニ參考ト爲シ得ルニ過ギズ依テ新ニ兵器トシテ採用セル魚雷ハ少クトモ左ノ如キ公試及試験ヲ經テ當事者ヲシテ據ル處ヲ知ラシメ苟クモ取扱上ニ過誤無ク且教範ニ示ス處ヲ遵守セバ必ズ其ノ性能ヲ發揮スベキモノナリトノ信念ヲ與ヘザルベカラズ

最初ニ新魚雷ヲ裝備スベキ艦船ニ就キ當該艦ガ戦闘及訓練ニ於テ實施スベキ諸要素ヲ以テ公試々驗ヲ爲スコト
右ノ如クセバ其ノ成績ハ確的ニ用兵者ノ指針トナリ爾後ニ惹起スベキ故障ハ取扱上ノ缺點ニアルコトヲ自覺セシメ魚雷ノ性能發揮上

大ナル利便アルノミナラズ明日ノ戰鬪ニ即應セシムルノ自信ヲ與フルコトヲ得ベシ(中略)

由來新魚雷ノ採用セラルルヤ最初ノ兩三年間ハ故障續出用兵者ヲシテ多人ノ苦辛ヲナサシメ來レルヲ常トシ六年式魚雷モ此ノ例ニ漏レザルベク用兵者ニ於テ一層取扱ニ習熟シ諸元ノ決定調整ト共ニ其ノ全能ヲ發揮スルニ至ルコト遠カラザルベシト雖艦隊ニ於テ魚雷ノ機能ヲ確的ナラシムル爲ニ基本訓練ニ多大ノ時日ヲ費サザルベカラザルハ大ニ考慮スベキコトニ屬ス況ンヤ行動豫算ノ極限セラルルニ當リテ基礎的訓練ノ爲ニ多大ノ日數ト燃料ヲ割カザルベカラザル狀況ニ於テオヤ

訓練ハ順序ヲ以テ簡ヨリ繁ニ易ヨリ難ニ進ム階梯アリト雖艦隊本來ノ任務ヨリ見ルトキハ常ニ緩急ニ即應スルノ覺悟並ニ準備ヲ要シ基本的訓練ハ單ニ年々歳々艦隊ノ編制ヲ新タニシ乗員ノ交迭ヲ伴フ關係上人ヲシテ器ニ習熟セシムル程度ニ於テセザルベカラズ過去ノ訓練ノ實績及幾多ノ戰訓ヲ打テ一丸トシ艦隊戰鬪力ヲ無限ニ長養スベキ際ニ與ヘラレタル兵器ノ性能ガ果シテ取扱上ノ不慣ニ依リ其ノ威力ヲ發揮スルコトヲ得ザルヤ將タ機構上ニ不備アリヤノ疑問裡ニ訓練ヲ進メザルベカラザルハ大ニ不可トスル所ニシテ延テ兵器ニ對スル觀念及士氣ニ影響スルコト多大ナリ

以上要スルニ

(一) 現制魚雷命中發射試驗規則ヲ改正シテ裝備艦船ノ戰鬪能力ニ適用スベキ實際ノ射程及速力ニテ命中發射試驗ヲ爲スコト

(二) 魚雷公試ヲ單ニ發射機公試ト爲スベク(一)ニ於テ試驗濟ミノモノヲ戰鬪及日常訓練ニ於テ實際發射スベキ状態ニテ爲スコト或ハ新魚雷裝備新艦ニ供給スル場合ハ訓練開始ニ先テ實驗發射トシテ工廠當事者ト艦船乘員ヲ以テ立會發射ヲ爲シ其ノ性能及調整諸元ノ要素ヲ決定スルコト

ヲ以テ必要トシ夫々規則ノ改正及實現ヲ望ムコト切ナリ

(終)

別紙第二

魚雷ニ關スル意見(摘要)

大正十五年十月

海軍水雷學校

從來使用ノ實績ニ鑑ミ研究ノ結果將來ノ魚雷ハ左記ノ如クナルヲ要ス

要領

- 一、現用六年式系魚雷ハ兵器トシテノ價值頗ル少ナク速ニ改造ヲ要ス
 - 二、將來計畫創作スベキ魚雷ハ大體高速力本位ト長射程本位トノ二種ニ限定區分スルヲ要ス
 - 三、計畫ト實驗検査トノ機關ヲ明確ニ分野シ實驗審査ノ一切ハ徹頭徹尾用兵家タル將校及下士官兵ノ手ニ依リテ遂行スルヲ要ス
- 右ニ對スル細説左ノ通

一、現用六年式系魚雷(六年式魚雷及八年式魚雷二號)ハ兵器トシテノ價值頗ル少ナシ速ニ改造ヲ要ス

六年式魚雷ガ艦隊ニ供給セラレテ以來年ヲ經ルコト茲ニ六年而モ機構複雜ニシテ取扱調整ノ至難ヲ歎ズルノ聲ハ今日尙息マズ而シテ本式系魚雷ノ艦隊ニ於ケル發射成績ハ別表ノ如ク累年若干ノ進歩アリシが大正十四年度及十五年度到達百分比ハ兩者略相等シクシテ殆ンド其ノ極點ニ到達シタルモノノ如ク基本教練發射ニ於テハ約七四%ヲ示セリ其ノ中八年式二號ニアリテハ未ダ演練向上ノ餘地アリト雖大正十五年度戰技ニ於ケル成績ハ總發射數四十七個ニシテ無故障熱走セリト認メラルモノ僅ニ二十二個(百分比四七%)ナリ

之ヲ四四式系魚雷(四四式魚雷及八年式一號魚雷)最近ノ發射成績ニ比スルニ四四式ニ在リテハ大正九年度戰團發射到達百分比七六、五%(總發射雷數二八五到達數二二七)大正十五年度基本教練發射到達百分比七一、七%(總發射雷數八六〇到達數六一六)ニシテ八年式魚雷一號ニアリテハ大正十四年度基本教練發射到達百分比七八、九%(總發射雷數七六到達數六〇)同戰團發射到達百分比九四、一%(總發射雷數一七到達數一六〇)ナリ即チ六年式系魚雷ハ雷速及射程ニ於テ若干ノ進歩ヲ認メラルト炸藥量ニ於テ勝ルトノ外精度ニ於テハ寧ろ劣ルトモ進歩セリトハ斷ズベカラズ且其ノ準備ニ當リテハ勞力ヲ要スルコト大

ナルハ到底其ノ比ニアラズ

艦ヲ戰時ニ於ケル水雷科員ノ技能ヲ考フルニ魚雷準備及發射ノ狀況ハ現在ヨリ良好ナルベシトハ思考シ得ベクモアラズ又戰時一行動中調整後ノ經過日數大ナル時及朝夕晝夜間發射ニ應ズル測定諸元ノ變換等ニ件フ精度ノ低下モ考慮セザルベカラズ又本式系魚雷ノ缺點トスル水壓點火法ハ複雑ニシテ作動ノ確實ヲ期シ難キ等ヲ考フルハ我現有六年式系魚雷ハ計畫上改良進歩セリト言フモ實際上疑ヒ無キ能ハズ大戰ノ貴重ナル經驗ヲ經タル歐米海軍ニ對シ本兵器ヲ以テ戰ハント誠ニ寒心ニ堪ヘザル所ナリ抑本式系魚雷ノ最大缺陷ハ機構ノ複雑ナルト機關ノ平衡不良ニシテ震動大ナルニアリ而シテ鈞合不良ナルト高速發射ニ於ケル射入狀態ノ不良ナルトハ愈精微ナル調整ヲ要求シ取扱ヲ困難ナラシメ延イテ精度ヲ低下シタリ

本式系魚雷準備ニ當リ規定セラレタル試驗調整ハ實ニ五十餘件ニシテ發射ニ當リ決定スベキ測定諸元十餘件(其ノ内絕對必要トスルハ深度、調和器縮度、斜進角度)ニ上レリ斯クノ如キヲ以テ現用六年式魚雷兵器トシテノ價值頗ル小ナリト斷セザルヲ得ズ速ニ改造ヲ要スルモノト認ム

二、將來計畫創作スベキ魚雷ハ之ヲ高速力本位ト長射程本位トノ二種類ニ限定區分スルヲ要ス(略)

三、計畫ト實驗トノ機關ヲ明ニ分野シ實驗ノ一切ハ徹頭徹尾用兵家タル將校及下士官兵ノ手ニ依リ遂行スルヲ要ス

新兵器ノ創作ニ當リテハ計畫ノ適切ナルヲ要スルノミナラズ能ク専門家ノ審議ニ問ヒテ之ヲ練リ以テ始メテ試作シ其ノ目的ニ適スル秩序の諸實驗ヲ行ヒ以テ此ノ計畫ヲシテ完全ナルモノトラシメ更ニ慎重ナル審議ヲ經テ始メテ實用制式兵器ニ採用セラルベキハ論ヲ俟タザル處ナリ之ガ計畫ニ當リテハ兵器ノ目的ニ應ジテ具備スベキ要件竝ニ製作上進據スベキ法則ノ決定スベキモノアリト雖要スルニ事實上ノ計畫ハ技術官ノ任ナリ而シテ製作兵器ノ完成ノ爲ニ行フ諸實驗ハ用兵者ヲ以テ施行セシムベキモノニシテ技術官ハ單ニ之ニ立會フノ程度ニ止ムベシ其ノ理由トスルトコロ概次ノ如シ

一、兵器完成後之ヲ戰場ニ使用スルハ用兵家タル將校及下士官兵ノ任ナレバ萬事ハ用兵家本位タラザルベカラズ

二、技術官ヲ以テ實驗ニ充ツル時ハ動モスレバ秩序の實驗ガ各種狀態ヲ網羅スルニ至ラズ机上ノ實驗ニ陥リ精緻ト技工ニ

走ツテ畢竟武人ノ辯用ニ適セザルモノト化シ陸上ノ兵器トナリ艦上ノ用ニ適セズ兵器ニ採用ノ曉豫期セザル困難缺陷ニ達着スルコト尠シトセズ

三、技術官ノ精密ナル頭腦ト職工ノ練達ナル技能ハ一般用兵家ニハ期待スベカラズ從テ技術官ノ實驗ニ好結果ヲ得タルモノモ用兵者ニ移シテ常ニ好結果ヲ得ルモノトハ限ラズ

四、計畫者ノミニテ實驗スルトキハ動モスレバ故障缺陷ニ際シテ之ガ處置姑息ニ陥リ徹底ヲ缺ク嫌ナシトセズ

之ニ反シ用兵家實驗關係者ノ人選宜シキヲ得バ以上ノ弊ハ自ラ除去セラレ却ツテ永年此ノ種兵器使用ノ貴重ナル經驗ヨリ豫期セザル缺陷ノ發見又ハ改造ニ關スル適切ナル着想出テ本實驗ニ副フ所以ナリト思考ス

斯ノ故ヲ以テ計畫ト實驗ノ機關ハ明ニ分野シ實驗ノ一切ハ徹頭徹尾之ヲ用兵家タル將校及下士官兵ノ手ニ依リテノミ遂行スルヲ要スルモノト認ム

此ノ點ニ於テ海軍水雷學校ハ實驗機關トシテ各種ノ點ニ就テ最適ノ關係アリ從テ魚雷實驗部ガ吳ニ分在スルハ其ノ目的達成上不利大ナリ仍テ兩機關ヲ密接ナラシムル爲魚雷實驗部ヲ横須賀ニ移ステ適當ナリト認ム

(終)

別紙第三

自大正十五年 至昭和五年 魚雷發射數對亡失數一覽表

大正十三年	年六、八式		其ノ他魚雷		内、聯合艦隊發射		合計		亡失數	亡失率	記事
	發射數	射數	發射數	射數	發射數	射數	合計				
一一五五											
九六											
七、六											

